

第10回市民学校

世界的な人権確立の潮流の中で

今私たちに求められているもの

高知県地域改善協会次長 岡 林 良 氏

前の職場のときにイギリスから三人の外国の青年がやってきた。外見の違いは気にせずにつきあえ、我々も親切にした。そのときふと、もしこれが中国や韓国、東南アジアの人であれば、私たちはこんなに親切にしないのではないかということを思った。それは、私たち日本人の心の中にまだ蔑視感が残っている気がするからである。

日本は、明治以後先進国に追いつくために資本主義社会を突っ走り、植民地がはしくなつて、手近な所に手を出した。そして明治の終わりのころから三十五年の間この国民を支配した。まず、土地を取り上げ、母国語の代わりに日本語を教え、強制した。そして日本の労働力を補うために二百万人に近い人々を日本の国へ送り込んで、

炭鉱など一番苦しい肉体労働を強いるところへあて、なかには名前さえも日本の名前をつけさせた。植民地政策はこの国でも大なり小なりその国を卑しめる政策をとるが、日本が朝鮮半島でとった植民地政策は実に厳しかったと言われている。当時小学校の子供であった私も、誰から教わったのでもないが、朝鮮人というのは卑しい人間の集まりだという意識をいつの間にか持たされていた。

不幸の歴史は朝鮮半島の人々だけでなく、同じ日本人の中に差別を作り出した。三百年以上前に今日の同和地区が作られた。広島、長崎に原子爆弾を落したアメリカ人などに対しては、憎しみやさげすみが残っている。朝鮮半島の人には、逆にこちらが相手の国に大変な苦しみ

を与えた。その日本人がなぜ相手の国をさげすみ、差別しなければならぬのか。なぜ同和地区や朝鮮半島の人々に対する差別意識が長く尾を引きずって、解決せずにきているのか。

悲しいかな私たちは、長い日本の社会体制の中で、人の値打ちを着ている物や肩書、生まれで決まるといふ意識をいつの間にか持っている。名刺にでかかど肩書を書く。肩書によって頭の下げようが違ってくる。

北朝鮮や韓国、中国の人が劣った民族であるなどということが言えるのだろうか。一昨年の学芸高校の生徒が中国で列車事故に遭った。遺族の方が来るのを知った中国人のたちは、彼らにとって最も大事な稲わらを持ち寄ってぬかるんだ道に敷き詰めて迎えてくれたそうだ。日

本人孤児が親を探して日本に連れてきている。あれだけひどい戦争をして、負けて逃げ帰っていった日本人が残した子供たちを中国の人は育て上げた。私たちにそのような気が起こるだろうか。そのような中国の人は日本人とは比較にならないくらい大きさが違う。その人たちを卑しめる価値が私たちにあるのだろうか。

第二次世界大戦以後、大國に支配されていた国々は何とか独立しようとして運動してきた。ドイツでもとうとうあのベルリンの壁が取り払われた。今や世界的に人権問題、戦争問題が一番大きな課題として取り組まれている。

世界的にアパルトヘイトが大きな問題になっている。これは南アフリカ連合共和国の政策で、白人に都合がいいようになっており、黒人と白人の生活水準は桁はずれに違う。世界中から抗議が上がり、援助や取り引きの中止が宣言されている。ところが、この国にはダイヤモンドや金、近代科学に必要な鉱物資源がたくさんあり、ほとんど日本が買い取っている。日本はその政策について批判は持っている

が、真っ向からその問題に対処できていない。また、日本人は外国へどんどん出て行って、かつては銃で蹂躪した国で、今度は札束で心を突き刺している。

同和問題などやらなくてもいいという人もいる。しかし、人間が人間を差別することがいかに愚かしく、恥ずべきことであるか、その人がどう責任を取ることもできないことをもって責め、のけ者にするということがいかに人間としてあってはならないことか、このことを国民は二十数年の中で学んできた。そしてその結果、差別を越えたい。ばらしい交流が生まれている。このことをこれからも引き継いでいかなければならない。

第十回市民学校が、五月十一日から二十九日まで、五回にわたって大篠公民館で開かれました。広報では、受講できなかった方のために、その一部を取り上げて掲載しています。

また、中央公民館では、市民学校の講演の録音テープを保存しています。テープの貸し出しを希望する方は、中央公民館(☎3498)までお申し込みください。